

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

# クールな防人

～最前線を守る機械職～

木曾川用水は、岐阜県南部、愛知県北西部、三重県北東部に水道用水、農業用水、工業用水を、また長良導水は愛知県知多半島に水道用水をそれぞれ供給しています。そんな愛知、岐阜、三重の東海三県の水のインフラストラクチャーを支えているのが木曾川用水総合管理所です。広域的な用水供給の舞台裏では、流量を調整するゲート、水を送り出すポンプなど多くの機械設備が役目を果たしています。今回は、これらを見守るプロフェッショナルである「機械職」と呼ばれる技術者に迫ります。

## 強く感じる「責任」

「機械」というと、自動車や船舶などをまず思い浮かべるのではないかと。小笠原の地元・愛知県は、自動車産業を始め、航空宇宙産業などが高度に集積する我が国のモノづくりの一大拠点である。級友の大半がこうした企業へと就職するなか、小笠原はあえて水資源開発公団(現 水資源機構)を選んだ。

「他人とは違ったことをやってみたくて何気なく思ったことがきっかけでした。動機は人それぞれ、むしろありふれた動機でないところに興味を持った。では、入社から15年が経った現在、自らの仕事をどのように感じているのだろうか。小笠原には、現場で数多くの機械設備に触れる度にますます強くなっていく思いがある。

「日頃、自分が任されている設備が止まったら・・・、考えるだけでもぞっとします。そのような設備のトラブル

## Profile

木曾川用水総合管理所 電気通信課

**小笠原 大輔** *Daisuke Ogasawara*

平成13年4月、水資源開発公団(現水資源機構)に入社。ダム、河口堰、用水路の管理業務の各現場で機械設備を担当。平成26年4月から現職。

が人々の生活に直結する責任重大な仕事です。」日本が世界有数の先進国となった今、水の安定供給など当たり前のように考える人も多いだろう。機械設備に不具合が生じれば水の供給に支障を来す。造作もないと思われることを一日も絶やさず継続するのは、その一端を担う者にとって大きなプレッシャーとして押し掛かる。



## 最前線に立つ自負

「土木、電気、建築などの構造物や設備、どれも必要不可欠ですが、必要なときに必要な量の水を供給するには、水の動きをつかさどるゲートやポンプなどの機械設備があって初めて実現するのだと思います。ですから、機械設備はあらゆる設備の最前線にあるのではないかと思います。」



不具合が起きぬよう日頃から点検・整備を怠らない。自分の眼でしっかりと機械の状態を現場で確かめておきたいという。これまでは人間のノウハウや勘に頼ってきたが、近年、技術の進展により様々なセンサーやコンピュータを用いて診断し、データ解析することが可能になりつつあるという。その可能性を認めつつも、「世の趨勢と異なるかもしれませんが、人間の力は決して侮れないと思います。」と小笠原は語る。

今の職場では、広域に膨大な機械設備が存在し、現場に行くだけで途方もない。一つとして同じものはない。五感を研ぎ澄まし、音、温度、におい、振動などから設備の状態や特徴を掴みとっていく。いざというとき、気づきや発想を与えてくれる源泉が現場にあり、丁寧に向き合うことで設備全体の理解に繋がると小笠原は信じる。

難しいのは状態の見極めだ。設備が故障すると、水の管理や供給にどのような影響をもたらすか。耐用年数が一応の目安となるけれども、使用される環境や状況によって設備の状態は様々。今後も使えるのか使えないのか、使えてもどのような整備が必要かなど整備の内容とその時期を見極める。農家をはじめ水を利用される方々を思い浮かべ、長く安心して使ってもらえるように心がけている。

## これから

「大規模な設備を初めから作ってみたい。」

技術者ならば誰しも感じるのかもしれない。近頃、小笠原にもこうした思いが去来する。これまで管理業務の

現場を中心に歩んできた。機械設備の更新や分解整備を行う度、先輩職員の設計思想に触れる。整備性や作業性などが練りに練られていることに驚かされることも多くある一方で、こうしたらもっと良いのにと、ときに歯がゆい思いもした。

機械職としての職務のみならず、配水管理など施設操作にも携わった。川の上流から下流に至るまでの水の流れやルールについての理解が進むのはもちろんだが、自らが携わる機械設備を点検・整備する時期、分解整備・設備更新時の代替運用などの立案・検討に活かせるようなヒントがいくつもあるという。

小笠原は、これからについて、これまで管理業務で培った経験や感じた思いを建設事業にぶつけることで、これまでと違った達成感、新たなやりがいを求めようしているのかもしれない。難しい仕事、重圧のかかる仕事、忙しい仕事は辛いけれども、成し遂げれば脳裏に鮮烈な印象を、手には確かな技術が残る。クールな装いとは裏腹に、小笠原はこれからを熱く見つめる。



車、サーフィンなど小笠原の趣味は多い。革細工も嗜むそうで、自分で革を裁断して縫い合わせ、財布などの小物を作るという。使い込むほど手に馴染み、色に味わいも出る。愛車も1968年式VWビートルを駆り、身近な道具への強いこだわりが窺える。